

ユニウスのエンブレム集（寓意図像集）公開に際して

植月恵一郎

日本大学芸術学部教授

ユニウス（Hadrianus Junius 1511-75）の寓意画像を公開するに当たって、まず三点強調しておきたい。第一に十六世紀ヨーロッパの文化事情にもっと注目しておきたい点、次にオンラインで公開することの意味、最後に二十一世紀の今の図案デザイン等にもつながるトピックである点だ。ユニウスとそのエンブレム集（エンブレムブック）については、伊藤、出羽、木村三氏の解説に詳しい。

十六世紀ヨーロッパ文化革命の二項対立的キー・イメージは、〈手〉対〈頭〉である。エリート貴族の子弟がラテン語で行った、スコラ哲学的韜晦体質の〈自由学芸（artes liberales）〉が現実的な魅力も威力もなくしたとき、〈手仕事の技芸（artes mechanicae）〉を担う職人たちの具体的な作業に基づく知の営みが一世紀間、世界をつなぎ、世界を救ったということだ。（山本義隆『一六世紀文化革命』1 & 2、みすず書房、2007年参照）。山本氏の著書は、議論を認識論におけるリアリズムの意義に焦点を絞り、芸術家の認識論から始めた点は卓越している。この技師や職人たちによる文化革命はまず「芸術家にはじまる」という素晴らしい視点で、正に芸術学部で公開するに相応しい。

言い換えれば、文書偏重・文字崇拜のスコラの思弁の枠組みから出ようとしないうちの中世以来の旧守の諸学が、火砲主体に変貌してゆく戦法、黒死病を始めとする伝染病の流行、大航海時代で拡大する一方の未知の経験などを前にお手上げになる最中、知的エリートたちからは蔑視されていたギルド的職人たちが、新時代に即応する知を、印刷術というハードウェアの展開に乗って、外部に向かって、ラテン語でなくヴァナキュラー（俗語）で公開し共有するというやり方で突破していったのが十六世紀で、産業革命以来の大転換を迫られている二十一世紀にオンラインで果敢に公開しようとする行為は、当時の彼らを反復しているようにも思える。

繰り返しになるが、活版印刷の草創期や十六世紀ヨーロッパの科学技術と芸術に目を向け、大学アカデミズムや人文主義者を中心としたルネサンス観に対し、商人や技術者の実践にも焦点を当てるべきなのだ。

以上、個別の学問分野での「16世紀文化革命」の展開を通覧してきた。それは外面的には学問の担い手の交代とその表現言語の変化として現れている。つまり職人や芸術家や商人たちが、俗語でもって自己表現を始め、それまでラテン語が専一的に支配していた文字文化の領域を越境したことで、知の独占の一角を崩したのである。しかしそれだけには止まらない。それは基本的には、視覚芸術における表現技法や技術者や職人の自然への働きかけの手順、そして商人による資本や商品を管理する手法、とりわけ的確な観察と精密な測定と正確な記録、総じて自然と世界に向き合う彼らの姿勢そのものが自然に関する知識の獲得に有効であるという新しい認識であり、ひいては自然について知がいかなるものであるべきかという真理観の根本的な転換を意味していた。（山本 621）

文書偏重から経験や実験重視へ、ラテン語から俗語による出版へ、カトリックからプロテスタントが生まれる時代に、いったい何が起こり、どのような結果を次の世紀にもたらしたかなど、ルネサンス像の再認識は、現代批判にもつながってこよう。

当時の「アカデミズムの世界では、実験や経験は認識手段としては低く見られて」(山本 17)おり、それを担う者たちは俗語で執筆するしかなかった側面もあるだろうが、それが知識の公開性をたかめ、多数の参加者を集めることも可能にしていった。こうした積み重ねが「真理を追究すべき場所が『遠い過去』の『権威ある文献』から、日常的な生産実践と日々開けてゆく地球へと変」(山本 27)えていったのである。

十六世紀は印刷革命の成熟とともに俗語としての地域言語による印刷刊本の登場が、学問と科学の普及に貢献し、庶民に学問と科学的知識が様々な面で十七世紀科学革命を準備したのは周知の事実である。科学と芸術は一見すると対立概念に見えるが、対立ではなく相補関係にある。その典型はダ・ヴィンチであり、ミケランジェロである。こうした文脈で、医者であり、古典学者であり、翻訳家であり、辞書編纂者であり、古物収集家であり、史料編集者でもあり、エンブレム作家であり、学長であり、ラテン語詩人でもあるユニウスという人物 (Cf. *The Kaleidoscopic Scholarship of Hadrianus Junius (1511-1575): Northern Humanism at the Dawn of the Dutch Golden Age*. Edited by Dirk van Miert. Brill, 2011) を考えると、大袈裟に言えば、ダ・ヴィンチ (Leonardo da Vinci 1452-1519) にも相当する多才な人物であった。

ユニウスと現代とのつながりの一つは、北アイルランドの献血を求める団体 (Cf. *Northern Ireland Blood Transfusion Service*) の商標に使われた〈ペリカン〉にある。周知のようにペリカンは親鳥が自らの体を傷つけた血で雛の命を救うと理解されていたところから、人類の罪を血で贖うキリストの象徴とされた。したがってとくにユニウスに限らず、当時の主要なエンブレム作家たちはこの象徴を使っているものの、ユニウスの場合、『エンブレム集』の第7番で使われた版木をプランタンが保存しており、それがイギリスのジェフリー・ホイットニー (Geoffrey Whitney c.1548-c.1601) の『エンブレム選集』に再利用される。これはちょうどヨーロッパの最果ての地ブリテン島にルネサンスが訪れるエリザベス女王 (Elizabeth I 在位 1558-1603) の時代だが、その礎を築いたのはヘンリー八世 (Henry VIII 1491-1547) でローマ・カトリックと決別し、イギリス国教会を立ち上げ、1588年にはアルマダの海戦でスペインの無敵艦隊を撃破し、制海権を手にしたイギリスは、新大陸と旧大陸を繋ぐハブとして機能し、全世界に進出してゆく点も周知の通りだ。こうした時代に誕生したエンブレムは、連綿と変形されながら受け継がれ、二十一世紀の北アイルランドで献血を呼び掛ける団体の商標に使われている (松田美作子『シェイクスピアとエンブレム—人文主義の文化的基層』慶應義塾大学出版会、2012年、27-29頁、なお松田氏は、平成24年日本大学大学院芸術学研究科に本書を提出し論文博士号を取得したことも併せて記しておく)。このように単に十六世紀に留まる話でもないのである。

伊藤博明氏がユニウスの紹介文を引用しているように、「エンブレムには少し謎めいたところがあり、その洗練された心地よい曖昧さのゆえに、それに特有の優雅さが生まれる。読者はその意味を見いだすことによって驚きと、そして最後に満足が得られる」というその魅力の一端に触れて頂ければ幸いである。なお、本寓意図像集の公開は、以下の科学研

究費補助金採択研究成果の一部でもある。平成 24・26 年度基盤研究(C)「近代英国を中心とするエンブレムにおける宗教と科学に関する学際的研究」(研究課題番号: 24520314)、研究代表者・植月恵一郎、研究分担者は、木村三郎日本大学芸術学部教授、伊藤博明埼玉大学教授、松田美作子成城大学准教授、山本真司天理大学国際学部准教授、出羽尚日本大学法学部非常勤講師である。